【展評】

# Drinking, Drinking, Drinking

## クリスチャン・マークレー展
## ロンドン、ホワイト・キューブ（バーモンジー）、
## 2015 年 1 月 28 日〜 4 月 12 日

大木美智子

音と物が離れ、音と物とイメージが離れ、音と物とイメージと言葉が離れ、聴覚と視覚と触覚が差異化されていったのはいつ頃からだろうか。音は抽象へ、物は具象へ、イメージは象徴へ、言葉は物語と形而上へ、それぞれに純化の道をたどりながら、一方で、分化された諸感覚器官は、宗教的体験や美的経験といった超越的な経験の内で共感覚の空間を保ってきた。日常に溢れる音は「雑音」となり、意図して奏でられた音が「音楽」となる。雑音は無意識のなかを右から左に流れ、音楽は観念の高みへと上りつめる。とはいえ、太古の昔から、この世界は意味不明の音、物、イメージ、音声の総体であり、私たちは已然として、その総体の中で聞き耳をたて、目を見張り、手探りしている。分化していかぬ認識、そういったものもまた私たちのひとつの感覚形態として、五感の世界を豊かにし続けているのではないだろうか。

雑音の世界を、ひとつの音楽形態としていち早く取り上げたのは、イタリア未来派の画家ルイジ・ルッソロであった（「騒音芸術」、1913 年）。ルッソロは、私たちを取り巻く空間を満たす全ての音―コップを置く音、ドアを明ける音、足を成らす音、電車が走る音、くしゃみをする音、話し声―現代都市そのものから発せられる有機的、無機的音の全てを、音楽芸術として、観念の高みにのぼった「音楽」を日常の身体感覚に取り戻すことを提案し、様々なオブジェを組み合わせては楽器を作り、身近にある音を集めて演奏会を行った。

その後、「サウンドアート」と呼ばれる芸術分野が台頭してくるのは 1970 年代であるが、クリスチャン・マークレー（1955-）はその先駆者のひとりとして評価を受けるアーティ

ストである。アメリカのマサチューセッツ芸術大学で芸術を学んだ後、1970 年代後半、ヨーゼフ・ボイスやフルクサスといった運動に影響を受けながらも、パンクロックへ傾倒、バンドを結成し音楽を制作し始める。その際、LP レコードのスクラッチ音をドラム代わりに使用し（ヒップホップのそれとは異なった文脈で）、レコードやターンテーブル自体を楽器として演奏する試みを行う。その後、彼のレコードへの執着は、楽器としてのレコードからオブジェとしてのレコード、イメージとしてのレコードへとシフトしていき、数種類のレコードをコラージュした作品『Recycled Record』（1980）や、レコードをギャラリーの床いっぱいに敷き詰めたインスタレーション『2822 Records (PS1)』（1987）などを制作。その他、100 本以上の映画の中から、電話が登場するシーンだけを切り取り、モンタージュしたビデオ作品『Telephones』（1995）、映画やテレビから時計が登場するシーンだけを取り出し、リアルタイムで 24 時間分の時計のモンタージュを行った大作『The Clock』（2010）など、音をイメージ、オブジェ、空間における聴覚以外の身体感覚をともなった実態として捉え直す試みを続けている。

ロンドンのホワイトキューブギャラリーで行われたマークレーの個展でもまた、音の体験をイメージ、言葉、物体、空間の中に拡散させていくような作品群が展示されている。ギャラリー通路の両壁に数メートルにわたりプロジェクションされた『Pub Crawl』(2014) では、早朝のロンドン、路上に転がる酒の空き瓶やコップを探してまわるマークレーが、発見した瓶を蹴ったり、棒でたたくなどして音を出す。通路を歩く観客は、ゴロゴロと転がる空き瓶の音やちんちんと鳴るコップの音を聞きながら、マークレーの早朝の音散歩を共にする。あるいは、漫画で使われる擬音語（Plop, Squish, Blub 等）を、その言葉が表す躍動感あるインクのしぶきとともにキャンバスに描いた絵画のシリーズや、ヒーローものの漫画や映画から集めた言葉（Boom! Whoosh! Zoooom! 等 ) を様々な形、色彩、速度で動かし、コラージュした映像作品『Surround Sounds』（2015）などでは、言葉と音、イメージの関係がダイナミックに視覚化され、探求されている。また会場内には、レコードを制作する巨大なプレス機が展示され、期間内の数日間、レコードをプレスする過程を見ることができるようになっており、マークレーの、物としてのレコードへの執着もまた健在である。中でも、ひときわ目をひいたのが、発見した楽譜を使ったインスタレーション『The Very Best Beer I Know』（2014）である。譜面はおそらく、マークレーが蚤の市、あるいは路上で拾ったものだと思われるが、19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍したイタリアの小説家ジョヴァンニ・ヴェルガによる小説『カヴァレリア・ルスティカーナ』をもとにした戯曲の一部のようである。譜面は一枚ずつ木枠の箱でフレーミングされ、計約２０枚近く、壁に掛けられ展示されているが、近づいてみると、それぞれの箱には中心に凸面のあるガラスが張られており、楽譜を見ようとすると中心部分は凸面で歪み、よく見えない。酔っぱらい、ピアノを弾こうとするとこんな気分になるのかもしれない、と思わせるような視覚の歪みを感じるが、そのうちの一枚は「Drinking, Drinking,

Drinking」とタイトルがついていており、続く譜面にも「See the merry wine is winking. See the bubbles brightly blinking. Then, comrades, let's be drinking」といったテキストが読み取れ、この楽譜がおもに酒を飲むこと、その喜びについて歌われている部分であることがわかる。その隣の部屋では、部屋の四方の壁に取り付けられた棚に、使い込まれたありとあらゆるビールメーカのロゴが入った数百個のコップが置かれたインスタレーションがなされており、殺菌されたまっ白なホワイトキューブの空間が一瞬、アルコールの匂いに咽せるパブの一角であるかのような錯覚を覚える。そしてその錯覚の中で気づくのは、マークレーが、酒を飲み、酔っぱらうことの身体的な単純さと知的な短絡さのようなものを、この個展の背後に忍ばせていることである。

マークレーの作品はどれも、そのナイーブさに愕然とするものがある。そこには常に、誰もが思いつくであろう、日常の中で一度は意識の中にのぼってきたであろう感覚と着想があり、コンセプチュアルというより、紋切り型の好奇心がもつ単純さと気恥ずかしさに貫かれている。概念化された耳の世界を、幼児的なナイーブさと、戦略的マテリアリズムによって、雑多な音とイメージと言葉と物に満ちた空間に戻し、雑多なまま提示する。音楽が雑音へ、耳から目、身体へと開かれ、その試みが「サウンドアート」という芸術ジャンルとして確立して数十年経つが、すでにこのジャンルも制度化と概念化が進んでおり、難解な理論武装の戦場となっている。だからこそ、マークレーのナイーブさ、観念の高みにのぼって行かぬ単純さが、新鮮に感じるのかもしれない。それは、酒を飲み酔っぱらうことの単純さ、そのナイーブであることの恥ずかしさと可笑しさ、馬鹿らしさと、同じ類いのものである。ロンドンとニューヨークを拠点に活動するマークレーであるが、『Pub Crawl』での散歩の映像は、ロンドンに住む者にはなじみの週末朝の風景である。イギリスのパブのほとんどは夜 11 時には閉店するが、そこから閉め出された我々にとって路上は酒場である。割れたビール瓶、パブから持ち出されたパイントグラスやワイングラスがバス停やゴミ箱の上、垣根の下など予期しない場所に置き去りにされ、翌朝、街中のそこかしこに前夜の酒道楽の残像が漂っている。その残像を蹴り回し、たたいてまわり、目の回る酔いどれの朝の音を楽しむ風情は、マークレーの極上のユーモアと馬鹿らしさであり、そのほとんど原始的な感性が捉える音の世界は、知性が萎えるほどの音と物と言葉とイメージの短絡的な結合の世界である。

ホワイト・キューブ
（大木美智子撮影、2015 年 2 月 1 日）